

心因性視能障害の視力検査



目的

低視力で心因性の疑いのある被検者に対する視力障害の有無の検出

準備物 他覚的屈折検査機器・(近見)視力表・字ひとつカード・検鏡枠・遮閉板・(plane)レンズ他

オートレフラクトメータや検影法などの他覚的屈折検査を行い、屈折の有無を確認する



屈折異常はほぼなく、あったとしても±0.5D位が多い。

例)

他覚的屈折検査値は両眼とも-0.25D だった！

両眼分離の前に斜視の有無を検査する



検査者は恐怖感を持たせないように笑顔で遊びの要素を取り入れて行き、信頼感の形成に努める。

例)

斜視はなかった！

検眼鏡を装用し、片眼裸眼視力を測定する

例)

RV=0.05、LV=0.05 だった！



主に両眼とも視力0.3以下が多い。測定のために視力の変動や低下があったり、距離を変えても不思議とその視力値で見えないということも多い。ただし、検査者は弱視の可能性も疑い余計な先入感を持たないこと。

場合によっては両眼だから良く見えるよねえ〜などと声かけをして両眼視力を測定する

トリック(中和)法 例

その他の方法 例

パンダの場合、中和法は度数の強い+レンズを装用させ、ぼやけてるけど不思議なレンズで見易くなるよ！などと言って徐々に-レンズを重ねてゆく。

距離を半分にしたら視力は大よそ半分として換算する。

ぼやける+レンズを装用させ、直ぐには中和レンズを重ねず、励ますか寄り添うかを考え「きっと段々見えるようになるよ！」などと声かけをしたりして視力表又は字ひとつカード又は「近くだから見えるかなあ？」と距離を半分にしたりにして、常に最初のレンズでぼやかしてから徐々に度数を下げる-レンズを重ねて視力検査を行い、最終的に中和したレンズ又は他覚的屈折値で視力が出るかを確認する



年齢と児童の性格をなるべく把握し、心の原因を視力で訴えていることを念頭に置き、暗示をかけるべきか？などを考え、視力が出るように色々工夫する。視力が出なくても、検査において矛盾点が確認できれば少なくとも心因性の可能性が大きい。

故意に度数の強いレンズを装用させ視力検査を行い、励ますか寄り添うかを考え「きっと段々見えるようになるよ！」などと声かけをしたりして装用しているレンズの上から徐々に度数を下げるレンズを重ねてから交換して視力検査を行い、最終的にplaneレンズ又は他覚的屈折値で視力が出るかを確認する

「近くだから見えるかも？これが見えたら凄いねえ〜」などと声かけをして近見視力表や近見字ひとつカードで視力検査を行い、可能であるなら中和法やplaneレンズや+レンズで無調節にしたりして視力が出るかを確認する

視力と行動に矛盾がないかカルテに記入する。例えばかなり小さなキャラクターを距離をおいて見せ、口や目が開いているか何気なく尋ねたりなど。ただしあくまでも客観的に。



最初にplaneレンズで確認する場合もある。

被検者について気づいた点などをコメントとしてカルテに記入し、医師が器質的疾患の有無を確認し(検査の前に最初に診察する病院もある)、視野(こんな時どうするの?の項を参照)・色覚検査などの依頼が来たら検査を行う

患者への対応

家族への対応

患児との対話を心がけ、訴えをそのまま受け入れ、患児の支持に努め、良い信頼関係を医師だけでなく眼科関係者と作れるような雰囲気づくりをする

医師は種々の検査成績から器質的疾患が除外されていることを説明し安心させた後、心の問題であることを傷つけないように話し、家族の協力が必要であり原因の検索、治療をすすめてゆくこと、治癒までには時間がかかることも有り、根気良く治療することで回復することを説明する

暗示療法、偽薬の投与、度のない眼鏡装用などで解決しない場合、心理面での他科との連携も行い根本の解決を図る

視力が回復するまで、症状に応じ大よそ1ヵ月~3ヵ月ごとに来院させる